

寸法まで俺のもの。

執着テーラー・縫谷宗介の仕立て部屋では、毎夜、採寸の手が恋

碧汐

目次

第１章　破れた衣装、縫う男　1
第２章　銀座の裏通りの仕立て屋　14
第３章　初めての採寸　26
第４章　仕付けの糸　40
第５章　他の手、他の目　56
第６章　夜の仕立て部屋　69
第７章　恋人という寸法　93
第８章　大手の専属話　108
第９章　手を離す男　122
第１０章　あんたにだけ、採寸させる　141

第1章　破れた衣装、縫う男

本番まで、あと十一分だった。

衣装の背中が裂けたのは、最終フィッティングの最中だった。肩甲骨のあたりで、安っぽい音がした。ぷつり、ではない。びり、と、はっきり裂けた。

「……嘘だろ」

俺、白瀬晴臣。二十七歳。モデル。売れかけ、という言葉を五年も背負ってきた男だ。身長百八十四。手足だけは長く生まれたけれど、それ以外に誇れるものは、ほとんどない。

今日のショーは、大手アパレルの来季コレクションの発表会だった。俺にとっては、ここ三ヶ月で一番大きな仕事だ。このショーで爪

痕を残せれば、念願の広告の話が進むかもしれない。マネージャーの佐伯さんは、朝からずっとそう言っていた。

そのショーの、本番十一分前に、衣装が破れた。

「白瀬さん、ちょっと待って、代わりの衣装――」

「代わりなんて、ないんです」

衣装担当の若い女性が、泣きそうな顔で首を振った。このジャケットはワンオフのサンプルで、同じものは存在しない。他のモデルとサイズもデザインも違う。代わりが利かないからこそ、俺が着ることになっていた。

控室は一気に騒然となった。誰かが裁縫セットを探しに走る。誰かが

「縫製の人間を呼べ」

と叫ぶ。けれど、この会場にいるスタッフはみな素人同然で、プロの縫製師など、いるはずがなかった。

――いるはずがなかったのに。

「貸せ」

低い声が、騒ぎの底から響いた。

振り返ると、男が一人、立っていた。黒いスーツを隙なく着こなした、長身の男。首には、黄ばんだメジャーが巻かれている。指先には針山が――いや、違う。ピンクッション代わりの小さな布を、左手の甲に巻き付けている。三十代の終わり頃。鋭い目つきで、灰色がかった青い瞳が、俺の背中の裂け目だけを見ていた。

「あ、あの、あなたは」

「この会場の衣装直しで入ってる、縫谷だ。――白瀬晴臣。二十七歳。百八十四センチ。肩幅四十四、胸囲九十四、胴回り七十八」

「……は？」

寸法まで俺のもの。

「合っているか」

男は俺の答えを待たず、俺の背後に回った。大きな手が、裂けた生地の縁を掴む。温かい、掌だった。

「数ヶ月前に、別の現場でお前を見た。そのときの寸法だ。だが、今は違う。胸囲は一センチ増えた。肩も、五ミリ大きくなっている。絞ったな。いい身体になった」

「な、なんで分かるんです」

「身体は嘘をつかない。……動くな。十一分もない」

ぱちん、と糸を切る音。そして、針が走る音がした。しゅ、しゅ、と布を糸が通る乾いた音。男の指は大きく、節くれ立っているのに、その動きは驚くほど繊細だった。裂け目が、みるみるうちに閉じていく。背中に、男の指先が何度も触れる。縫うためだ。それだけのために触れているのに、俺の背中の皮

膚は、その熱にいちいち反応した。

「――できた」

七分。たった七分で、裂け目は消えていた。いや、消えたのではない。縫い目自体が、デザインの一部に見える。男は裂け目を隠すのではなく、ステッチの走る位置を計算して、意匠に変えてしまっていた。

「すご……」

「本番だ。行け」

男――縫谷は、それだけ言って踵を返した。俺は思わず、その背中を呼び止めた。

「待ってください！　お礼を――」

「礼なら、仕事で返せ。俺の店に来い。銀座の裏通り、『テーラー縫谷』だ」

「え、でも」

「お前の身体は、俺の手で仕立てるべき身体だ。……行け。時間だ」
その言葉を背に、俺はランウェイへ走った。
ショーは成功した。裂けたはずのジャケットは、審査員のデザイナーに
「背中のステッチが秀逸だ」
と褒められた。打ち上げの席で、佐伯さんが小躍りした。
「白瀬、今日のあんた、一段違ったよ」。
けれど俺の頭の中は、終始、あの男の手のことばかりだった。
一目見ただけで、寸法を言い当てる男。俺の身体の変化を、一センチ単位で見抜く男。
――お前の身体は、俺の手で仕立てるべき身体だ。
その一言が、耳の奥で何度も再生された。褒め言葉のつもりなのだろう。
職人の、ただの評価なのだろう。なのに俺は、その夜、眠れなかった。

二十七歳。モデルとして売れるかどうかの、瀬戸際の年齢だ。若い子はどんどん出てくる。俺には、もう後がない。

その瀬戸際で、初めて出会った男に言われたのだ。

「お前の身体は、俺の手で」

と。

あれは、選ばれたということなのだろうか。

俺は翌日、気づけば銀座の裏通りを歩いていた。

打ち上げの帰り道、俺は一人、夜の街を歩いた。

ショーの成功。デザイナーの言葉。佐伯さんの笑顔。モデルとしての俺の評価は、今日確かに一段上がった。なのに、俺の頭の中で繰り返されるのは、成功の実感ではなく、あの男の手の感触だった。

背中に触れた、大きな掌。七分間、針を走らせ続けた指先。あの手は、俺の

背中の裂け目を縫っただけではない。何か、俺の中でほつれていたものを、一緒に縫い合わせた気がした。

モデルになって八年。俺は、ずっと

「ほつれた」

ままだったのかもしれない。

十九歳で田舎から出てきて、オーディションに落ち続けて、事務所の先輩たちに追い越されて。

「白瀬は素材はいいのに、あと一歩が」

という言葉を、何度聞いたか分からない。あと一歩。その一歩が、何なのかも分からないまま、二十七歳になった。

今日、その一歩を、あの男は言い当てたのかもしれない。

「服が、身体に合っていなかった」

のだと。身体に合わない服を着て、身体に合わない評価を受けて、身体に合わない生き方をしてきた。だから、ほつれたのだ。

「お前の身体は、俺の手で仕立てるべき身体だ」

あの言葉は、乱暴なようでいて、俺の八年間への、初めての正確な診断だった。

自宅の最寄り駅で降りて、コンビニに寄った。夕食を買うためだ。だが、棚の前で足が止まった。カップ麺と、おにぎりと、サラダチキン。いつもの、モデルのような、モデルのためだけのような食事。

ふと、宗介の言葉が蘇った。

「身体は嘘をつかない」。

俺は、カゴに野菜ジュースと、温かい惣菜を入れた。少しだけ、まともな食事にしたくなった。誰のためでもない。明日、銀座へ行く自分のために。

店に行くことは、もう決めていた。契約するかどうかは分からない。だが、あの男に、もう一度会わなければならない。それだけは、身体が知っていた。

帰宅して、シャツを脱いだ。鏡の前で、自分の背中を見る。肩甲骨のあたり。裂けた衣装を縫ってもらった場所——正確には、衣装の背中だ。だが俺には、自分の背中そのものを縫ってもらったような気がしてならなかった。

明日。銀座の裏通り。真鍮のプレートの店。

俺は、早めに布団に入った。明日、いい顔で会うために。二十七歳にもなって、遠足の前の子供みたいだ、と自分で笑った。だが、その笑いは、嫌な笑いではなかった。

久しぶりに、朝が待ち遠しい夜だった。

契約の日の夜、俺は佐伯さんに電話をした。専属契約のことは、当然言えない。だが、今日の出来事の興奮を、誰かに話したかった。

「佐伯さん、今日の衣装直しの人、すごかったんです。七分で直しちゃって」
「ああ、あの縫谷って職人さん？　業界じゃ有名だよ。腕は一流、でも偏屈で、表に出たがらない。うちの事務所も昔、仕事を頼もうとして断られたことがある」
「そんなに、有名な人だったんですか」
「有名だよ。あの人の服を着られるのは、限られた人間だけだって話だ。――白瀬、あんた、声がはずんでるね。いいことあった？」
「……少し、だけ」
電話を切ってから、俺は考えた。限られた人間だけが、着られる服。その「限られた人間」
に、俺は今日、入ったのだろうか。入ったのだとしたら、それは奇跡のような話だった。

だが一方で、不思議な実感もあった。俺はあの店で、素材として値踏みされなかった。数字で評価されながらも、数字以上のものとして見られた。それが、八年間のモデル生活で、初めてのことだった。

翌日、俺はジムへ行った。トレーナーに、メニューの見直しを相談した。

「急に、やる気が出ましたね」

と笑われた。やる気の理由は、言わなかった。

身体を作る、という行為の意味が、変わり始めていた。これまでは、仕事のため、選ばれるためだった。今は違う。あの男に、覚えてもらうためだ。あの男の台帳の頁を、誇れる数字で埋めるためだ。

シャワーを浴びて、鏡を見た。二十七歳の、俺の身体。この身体で、俺はこれから、あの男と何度も向き合うことになる。

「よろしくな」

鏡の中の自分に、思わず声をかけていた。それくらい、俺の心は浮き立っていた。

第2章　銀座の裏通りの仕立て屋

『テーラー縫谷』は、銀座の表通りから一本入った、古いビルの二階にあった。

看板は小さい。真鍮のプレートに、店名だけが彫られている。扉を開けると、鈴が鳴った。

店内は、深い緑の壁だった。壁一面に生地の見本帳と、反物が並んでいる。真鍮のランプ。革張りの椅子。中央には大きな裁断台があり、そこに昨日見た男――縫谷宗介が、鋏を手に立っていた。

「来たか」

「……おはようございます。昨日のお礼が言いたくて」

「礼は要らないと言ったはずだ」。

宗介は鋏を置くと、俺を頭の先からつま先まで、ゆっくりと見た。
「だが、来たからには話が早い。白瀬晴臣。俺と、専属の仕立て契約を結ばないか」
「専属、ですか」
「お前の仕事着の一切を、俺が仕立てる。ショーの衣装、撮影の衣装、プライベートのスーツまで。代わりに条件がある。お前の採寸は、俺以外にさせない。他のテーラーに身体を測らせるな。それが条件だ」
唐突な申し出だった。だが、その内容よりも先に、俺は条件の異様さに引っかかった。
「採寸を、他の人にさせるな……ですか」
「ああ」
「なんで、そこまで」

「身体の寸法は、預かる側の責任だ。測るたびに数値は変わる。誰の手が測ったかで、仕立ては狂う」。

宗介は首のメジャーを指で弾いた。

「それに――」

「それに？」

「一度、俺が覚えた身体だ。他の男の手が、測り直すのは気に食わない」

まっすぐに、そう言った。三十九歳。後で知ったことだが、縫谷宗介は三十九歳で、この界隈では知らぬ者のいない仕立て職人だった。大手ブランドのサンプル縫製を一手に引き受け、芸能人のオーダースーツを何着も手がけている。それでいて、表に出ることを嫌い、店は紹介制。そんな男が、売れかけのモデルに

「気に食わない」

などという、職分を越えた言葉を、臆面もなく口にした。

「……それ、契約の条件として、変じゃないですか」

「変だな」。

宗介は認めた。

「だから、断ってもいい。だが、よく聞け。お前は二十七だ。モデルの寿命は短い。今のお前の事務所の衣装は、既製品の吊るしばかりだ。身体に合っていない服は、身体の価値を下げる。俺が仕立てれば、お前は化ける。――その代わり、身体は俺に預けろ。採寸も、仕付けも、全部だ。嫌なら、今すぐ帰れ」

逃げ道は、きちんと開かれていた。断る自由は、目の前にあった。

俺は、考えた。事務所には内緒の話だ。ばれれば面倒なことになる。けれど。

昨日の、背中のあの手。七分で衣装を意匠に変えた腕。選ばれるという実感。二十七歳の俺には、もう、迷っている時間の方が惜しかった。

「……契約書は、ありますか」
「ある」
宗介は引き出しから、契約書を取り出した。二通。条文は驚くほど整っていた。仕立ての範囲、納期、対価、そして――
「採寸および仮縫い（仕付け）は縫谷宗介本人が行うものとし、甲（白瀬晴臣）は期間中、第三者に採寸を委ねない」。
例の条件が、きちんと文字になっていた。
そして最終条。
「甲はいつでも、一方的な意思表示で本契約を解除できる。違約金は発生しない」。
「解除自由、ですか」
「預かるというのは、そういうことだ。お前が嫌だと言えば、その場で終わる。

その代わり、続けるなら――」。

宗介の灰青の瞳が、俺を射抜いた。

「続けるなら、お前の意思で続けろ。俺は、無理に縫い付けたりはしない」

俺は、署名した。自分の意思で。自分の名前を、はっきりと書いた。

「よし」。

宗介は契約書を受け取り、わずかに、笑った。初めて見る笑顔だった。

「では今日から、お前の身体は俺の担当だ。――まず、測り直す。今の、正確な寸法を」

「今、ですか」

「今だ。上着を脱げ」

鈴の音が、もう一度鳴った。誰も入ってきていないのに。風のせいだったのかもしれない。

俺は震える指で、シャツのボタンに手をかけた。

署名をした帰り道、俺は自分のしたことの大きさに、少し遅れて気づいた。専属の仕立て契約。条件は、採寸の独占。モデルが、事務所にも内緒で、そんな契約を個人と結ぶ。ばれれば、ただでは済まない。

だが不思議と、後悔はなかった。むしろ、胸の奥がすっと静かだった。選ばれる側でしかなかった俺が、初めて

「自分で選んで」

何かを決めた。その実感が、足取りを軽くしていた。

自宅に戻って、俺は鏡の前に立った。シャツを脱ぎ、今日測られたばかりの身体を見る。胸囲九十五、胴回り七十八、肩幅四十四。宗介の声で読み上げられた数字が、耳に残っていた。

「お前の身体は、俺の手で仕立てるべき身体だ」

あの男は、俺の何を見たのだろう。五年も
「売れかけ」
と呼ばれてきた、この身体の何を。
携帯が鳴った。宗介からだった。
『今日の採寸データは台帳に付けた。次回は三日後、十九時。食事は軽めに済ませて来い。測る前の暴飲暴食は、数字が狂う』
業務連絡のような文面。だが、最後に一行、付け加えられていた。
『――今日は、よく決断した』
俺は、その一行を何度も読み返した。
褒められることに、俺は慣れていない。モデルは褒められる仕事だが、それはいつも
「素材」

への評価だった。顔がいい、脚が長い、雰囲気がある。そのどれも、俺の意思とは関係のない、生まれつきの話だった。

だが今日の言葉は、違った。宗介は、俺の

「決断」

を褒めた。俺の意思を、見てくれた。

三日後が、待ち遠しかった。モデル人生で初めて、誰かに会いに行く日を、指折り数えて待った。

契約を結んだ日、俺はもう一つ、店の奥の空気について知った。

宗介は、俺に店の中を案内してくれた。裁断台の由来。壁の生地見本の並びの意味。奥の収納には、何十年分もの型紙が、客ごとに整理されて眠っていた。

「型紙は、客の身体の写しだ。だから、粗末には扱えない。客が死んでも、その

型紙は十年は残す。弟子の代になっても、だ」
「……俺の型紙も、ここに残るんですか」
「ああ。お前の型紙は、もう作った。最初の一着の分だ。――お前が何歳になっても、この棚に残る」
何気ない言葉だった。だが俺には、その言葉が、妙に重く響いた。自分の身体の
「写し」
が、この店の棚に、十年も二十年も残り続けるということ。それはつまり、俺という人間の存在が、この男の人生の棚に、正式に収まったということだった。
「宗介さん」
「うん」

「俺、頑張ります。この店に、型紙を残すに値するモデルに、なります」
「期待している。だが、無理はするな。身体が資本だ。壊したら、元も子もない」
帰り際に、宗介は俺の肩幅を、服の上から掌で確かめた。
「やはり四十四だ。寸分の狂いもない」
「測らなくても、分かるんですね」
「掌が、覚えたんだ。これからは、数字より先に、手が覚えていく。――気をつけて帰れ」

店を出て、俺は裏通りを歩いた。看板の明かりが、後ろで小さくなっていく。

不思議な契約だった。不思議な男だった。だが、俺の直感は言っていた。この契約は、俺の人生の転機になる、と。

あのときの直感は、正しかった。ただ、その転機の大きさは、当時の俺の想像を、はるかに超えていたのだが。

仕立て部屋は、店の奥にあった。

合わせ鏡が三面。低い台。窓には厚いカーテン。宗介は扉に鍵をかけた。かちり、と音がした。

「外から見える場所じゃない。安心しろ」

「……はい」

「下着一枚になれ。正確に測るには、それが一番いい。無理なら、シャツ一枚でも構わない。お前が選べ」

選べ、と言われた。モデルの仕事では、着替えも採寸も、たいてい流れ作業だ。意思を確認されることなど、滅多にない。宗介は、いちいち止まる。いちいち聞く。その丁寧さが、かえって俺の鼓動を速くした。

「……下着で、お願いします。正確な方が、いい」
「分かった」
タンクトップと下着だけになった俺は、台の上に立った。鏡の中の自分の姿が、やけに頼りなく見えた。
「測るぞ。身体に触れる。嫌な場所があったら、その場で言え」
「はい」
「声に出せ。『続ける』も『やめろ』も、言葉にしろ。俺は言葉に出されたものしか、信じない」
宗介は膝をつき、まず足首から測り始めた。メジャーの冷たい感触。その下にある宗介の指は、温かかった。ふくらはぎ、膝、腿。メジャーが巻かれるたび、宗介の指の腹が、俺の皮膚をそっと滑る。
「腿回り、五十六。……絞ったな。前は五十八あったはずだ」

「ジムで、週三回走ってます」
「走るのはいい。だが、落としすぎるな。お前の脚は、少し肉があった方がラインが美しい」
淡々と、測る。腰。メジャーが腰骨のあたりを一周する。宗介の大きな両手が、俺の腰の前で交差した。顔が近い。息が、腹にかかった。
「胴回り、七十八。昨日と同じだ」
「……」
「緊張してるな。腹に力が入っている。抜け」
「す、すみません」
「謝るな。初めて俺に身体を預けるんだ。緊張するのは当然だ」。
宗介は立ち上がり、俺の胸にメジャーを回した。背後から回すのではなく、正面から、俺と向き合って。腕が俺の身体を抱き込むような形になった。

「胸囲、九十五。昨日より一センチ増えたのは、絞った分、筋肉がついたからだ。いい変化だ」
「そんなことまで」
「俺は身体を覚える男だ。一度預かった身体の変化は、一センチでも見逃さない」
胸の次は、肩。首筋。宗介の指が、俺の鎖骨をなぞるように測る。二の腕。手首。首に回したメジャーが、喉仏の下を通った。
近い。近すぎる。宗介の顔が、俺の顔のすぐそばにあった。整髪料の匂いではなく、生地と石鹸の匂いがした。三十九歳の男の、静かな匂い。
「……宗介さん」
「なんだ」
「モデルって、採寸は慣れてるはずなんですけど」

「ああ」
「なんで、こんなに緊張するんですかね」
宗介の手が、止まった。灰青の瞳が、鏡越しではなく、直接俺を見た。
「それは、お前が今、『測られる側』じゃなく『預ける側』にいるからだ。――俺もだ。ただ測っているだけなら、手は震えない」
宗介は、ゆっくりとメジャーを外した。
「今日はここまでだ。続きの細部は、仕付けのときに合わせる。……服を着ろ。風邪を引く」
「はい」
俺は服を着た。指先が、まだ震えていた。緊張のせいだけではない気がして、俺はその震えの名付けを、先延ばしにした。
その日から、俺の身体の記録は、宗介の台帳に移った。古い革表紙の台帳。

ページをめくると、何年分もの寸法が、几帳面な字で並んでいた。俺のページは、一番最後の新しい頁に作られた。
「白瀬晴臣。二十七歳。初回採寸」。
そう書いて、宗介はペンを置いた。
「その台帳、他の人のも全部？」
「ああ。顧客全員分だ」
「……じゃあ、俺もその一人、ってことですね」
「違うな」。
宗介は台帳を閉じた。
「お前の頁だけ、俺は毎日開く。変化を見逃さないためだ。――特別扱いだ、自覚しておけ」
職人の言葉なのか、それ以外なのか。そのときの俺には、まだ分からなかっ

た。

二度目の採寸は、三日後の夜だった。

今度は、シャツとパンツの細部を見るための採寸だった。宗介は、初回よりもさらに細かく、俺の身体を測った。腕の長さは、肩の付け根から手首まで、一センチ刻みで左右別々に。首の角度。背中の反り。立つ姿勢の癖まで、宗介は鏡を使って確認した。

「お前は、右肩が三ミリ下がっている」

「え、そうなんですか」

「鞄を右で持つ癖があるからだ。——気にするな。人間の身体は左右対称じゃない。その非対称に合わせて縫うのが、仕立ての仕事だ。吊るしの服は、そこを無視する。だから吊るしは、お前の身体に謝らない」

宗介の言葉は、いつも服の話の形をして、俺自身の話をしていた。身体の

癖も、生き方の癖も、この男には全部見えている気がした。
採寸の後、宗介は小さな台所で、簡単な夕食を作ってくれた。鶏の煮物と、味噌汁と、炊きたてのご飯。
「測るだけ測って、帰すわけにはいかない。お前の身体は、明日の撮影のために、きちんと食べておくべきだ」。
「……宗介さんって、他のお客さんにも、こんなに」
「客には、茶までだ」。
宗介は味噌汁を啜った。
「飯を作るのは、お前が二人目だ」
「一人目は？」
「師匠だ。若い頃、店に泊まり込んで修業していた時期があってな。その頃、師匠が毎晩、飯を作ってくれた。『職人の身体は資本だ。食わせるのも仕立て

のうちだ』と。――俺はあの味で、職人になった」

宗介は、師匠の話をするときだけ、声の質が変わった。敬意と、喪失と、その両方を含んだ声だった。

「宗介さんの師匠って、どんな人だったんですか」

「厳しい人だった。寸法の読み違いは、一ミリでも許されなかった。だが、一度だけ褒められたことがある。俺が二十代の終わりに、初めて客の身体を『覚えた』ときだ。師匠は言った。『数字を測るのは誰でもできる。身体を覚えるのは、お前だけだ』と」

「……素敵な言葉ですね」

「ああ。俺の宝だ」

宗介は、俺の茶碗にご飯を足した。

「晴臣。俺はお前の身体を、覚え始めた。まだ途中だ。全部を覚えるまで、時間

がかかる。だから、長く付き合ってもらうぞ」

「はい。……俺も、宗介さんの手に、長くお願いしたいです」

その夜、帰り道の銀座は、雨上がりで濡れていた。街灯が舗道に反射して、宝石みたいに光っていた。

俺は思った。この契約は、仕事の契約の形をしている。だが中身は、もっと別の何かに育ち始めている。測る男と、測られる男。その反復の先に、何があるのか。まだ名前はなかった。だが、俺の身体は、すでに答えを知っているようだった。宗介の手が触れる場所が、次に触れられるのを待っている。それは、もう職業上の反応ではなかった。

シャツの仮縫いの日は、今でも鮮明に覚えている。

白いシャツの仮縫い。宗介は、俺にそのシャツを着せ、襟の立ち方、袖の長さ、裾の落ち方を、一つずつ確かめていった。だが、その日の仕付けは、いつ

もと少し違った。宗介の手が、俺の身体に触れる時間が、長かったのだ。
「……宗介さん」
「なんだ」
「今の手、仕付けに関係あります？」
宗介は、俺の脇腹に置いていた手を、止めた。だが、離しはしなかった。
「……ない」
「ないんですか」
「ああ。お前の腰の線を、ただ、確かめたくなった。すまない。――離す」
「離さなくて、いいです」
俺の言葉に、宗介の目が揺れた。
「晴臣」
「俺の身体は、宗介さんの担当でしょう。……確かめるのも、仕事のうちです」

それは、半分は冗談で、半分は本気だった。宗介は、しばらくの沈黙のあと、低く笑った。

「……お前は、俺を試すようになったな」

「試してません。委ねてるんです」

宗介の手が、俺の腰から背中へ、ゆっくりと滑った。服の上からでも、その掌の形が分かった。俺の背筋が、小さく震えた。嫌な震えではない。むしろ、その逆の、困った震えだった。

「これ以上は」

宗介は、自分でブレーキをかけた。手を離し、一歩下がった。

「これ以上は、職分の外側だ。晴臣。俺は、お前の身体を預かっている。その信頼を、自分の欲望で汚すわけにはいかない」

「宗介さんにとっては、『汚す』ことなんですか」

「違う」。

宗介は、即座に否定した。

「俺の欲望が、軽いものではないからだ。軽くないからこそ、お前の言葉がなければ、手を出せない。――俺の流儀を、理解してくれ」

その律儀さに、俺は胸を打たれた。この男は、欲望がないのではない。欲望が、深すぎるのだ。深すぎるから、相手の意思という形を取らなければ、踏み出せない。

その日の帰り際。俺は、店の扉のところで、思い切って言った。

「宗介さん」

「うん」

「いつか、俺の言葉を、待たなくてもいい日が来ますかね」

宗介は、しばらく黙っていた。それから、俺の頭に、ぽんと手を置いた。

「……その言葉の意味を、お前自身が分かってからだ。分かったら、そのときは、きちんと言葉にしろ。俺は、待っている」

扉の鈴が鳴った。俺は、夜の銀座を歩きながら、自分の言葉の意味を反芻した。

いつか、俺の言葉で、この男に踏み出させたい。その日は、思ったよりも早く来るのだと、このときの俺はまだ知らなかった。

第4章　仕付けの糸

仕付け、という言葉を初めて知った。

本縫いの前に、粗い糸で仮に縫い合わせ、身体に当てて線を直す工程のことだ。白い、太い糸。縫っては解き、縫っては解く。その反復のために、モデルは何度も服を着て、何度も身体を預ける。

最初の仕立ては、俺のプライベート用のスーツだった。濃紺の三つ揃い。生地は宗介が選んだ。

「お前の肌の色には、これだ」

と、迷いのない手つきで反物を広げた。

一週間後、仮縫いの日が来た。

「着てみろ。まだ袖は付いていない。胴の線だけだ」

俺はジャケットの胴部分――ベストのような形の仮縫いを羽織った。宗介は俺の周りを回り、ところどころに待ち針を打つ。ちくり、と針が布を刺す音。宗介の指が、俺の背中の中央を、上から下へなぞった。

「背中の線は、もう少し寄せる。……腰。ここだ。ここに五ミリの余裕を持たせる」

「五ミリ」

「五ミリで、座ったときの皺が消える。お前は撮影で座るポーズが多い。――ほら、座ってみろ」

言われるまま椅子に座る。宗介は膝をついて、俺の膝の位置、裾の流れを確認する。その姿勢は、まるで臣下が主に仕えるような、あるいは――。

「白瀬」

「はい」

寸法まで俺のもの。

「仕付けというのはな、服の側が身体に謝りに行く工程だ。身体が服に合わせるんじゃない。服が、何度も身体に頭を下げる。だから何度も着て、何度も外す。その手間を惜しむ服は、身体を裏切る」

針が、また布を通る。宗介の手が俺の脇腹に触れた。線を確かめるためだ。ただそれだけのはずの指が、俺の脇腹の皮膚の熱まで拾っている気がした。

「……宗介さんは、服にだけ、こんなに丁寧なんですか」

手が、止んだ。

「どういう意味だ」

「いや、その……お客さん全員に、ここまで」

「全員には、しない」。

宗介は針を針山に戻し、立ち上がった。俺を見下ろす灰青の瞳は、いつもより暗かった。

寸法まで俺のもの。

「仮縫いは普通、弟子に任せる。お前の仕付けは、最初から最後まで俺一人でやる。袖付けも、釦ホールもだ。理由を聞くな。……聞かれても、答えは一つだ。お前の身体は、他の人間の手に慣れさせたくない。それだけだ」

心臓が、跳ねた。

独占欲、という言葉が頭に浮かんだ。だが職人のそれは、もっと静かで、もっと深い場所から来ていた。自分の手を離れたら、この身体は誰のものになるのか。そんな、原始的な不安に近い執着。

「……宗介さん」

「なんだ」

「俺は、他のテーラーに行くつもり、ないですよ」

「口約束は信じないと言ったはずだ」。

宗介は仮縫いの服の肩を、そっと直した。

「行動で示せ。お前は、毎週ここに来る。身体を預ける。それが積み重なれば、自然と信じるようになる」

「はい」

「脱げ。今日の分は終わりだ。……次は三日後。シャツの仮縫いも始める」

俺は仮縫いを脱いだ。白い仕付け糸の跡が、服の上に波のように残っていた。

縫っては解く。その反復が、身体を預ける合意の積み重ねになるのだと、宗介は言った。

実際、そのとおりだった。三日ごと、俺は銀座の裏通りに通った。測られ、着せられ、針を打たれ、解かれる。回を重ねるごとに、俺の身体は宗介の手に慣れていった。最初の頃は跳ねていた鼓動が、だんだんと、別の種類の熱に変わっていった。

宗介の手が触れるたび、俺は安心した。そして安心する自分に、驚いた。

この男の前でだけ、俺は無防備でいられた。

仕付けの日々の中で、忘れられない日が、二つある。

一つは、宗介の店に、別の客が来ていた日だ。有名な俳優だった。テレビで誰もが見る顔。その俳優のスーツの仕付けを、宗介は弟子――店に週に何度か来る若い職人の青年――に任せていた。

「あの人の仕付けは、宗介さんがやらないんですか」

帰り際に、つい聞いた。宗介は、作業台の鋏を研ぎながら答えた。

「やらない。俺の手は、今はお前で手一杯だ」

「手一杯、ですか」

「一人の身体を覚えるというのはな、全力の仕事だ。二人も三人も、同時に覚えられるほど、俺の手は器用じゃない」。

宗介は鋏を置いて、俺を見た。
「分かったか。お前は、俺の『手一杯』だ」
もう一つは、雨の夜だった。
仕付けが長引いて、終電がなくなった。タクシーもつかまらない。宗介は言った。
「奥に仮眠室がある。泊まっていけ」。
仮眠室は、狭い部屋だった。ベッドが一つと、小さな本棚。宗介は毛布を余分に出してくれて、自分は仕立て部屋のソファで寝ると言った。
「宗介さん、俺がソファでいいです。泊めてもらう側なのに」
「駄目だ。お前の身体は、明日も仕事だろう。ソファで寝て、肩を凝らしたら、数字が変わる」
「……宗介さんって、本当に、俺の身体のことばっかりですね」

「そうだな」。

宗介は、扉のところで立ち止まった。

「晴臣。俺にとってお前の身体は、仕事であり、責任であり……」

言いかけて、宗介は首を振った。

「いや、今のは忘れろ。おやすみ」

扉が閉まった。俺はベッドに横になって、天井を見た。

仕事であり、責任であり、その先は、何だったのだろう。

その続きの言葉を、俺はいつか、この男の口から聞きたいと思った。聞く資格が、自分にあるのかは分からなかった。だが、仕付けの糸は、縫っては解かれ、また縫われる。俺たちの関係も、きっとそうやって、少しずつ本縫いに近づいていくのだと、その夜の俺は信じていた。

翌朝、目覚めると、台所から味噌汁の匂いがした。宗介が、朝食を作って待っ

ていた。
「寝癖がついている。……直してから、飯だ」
「はい」
他愛のない朝だった。けれど俺は、この朝の他愛なさを、五年間のモデル生活のどんな朝よりも、大事に思った。
スーツの仕付けが進むにつれて、俺と宗介の距離は、目に見えて近くなっていった。
ある日の仕付けでは、パンツのラインを見ていた宗介が、ふと手を止めた。
「晴臣。最近、左の腿の張りが変わった」
「え。ジムで、メニューを変えたからですかね」
「ああ。それもある。だが、もう一つ」。
宗介は、俺の腰の位置を、掌でそっと確かめた。

「歩き方が変わった。自信のある歩き方に。――何か、いいことがあったか」
「……昨日の撮影で、初めて指名をもらったんです。カメラマンの、指名」
「そうか」。
　宗介は、目を細めた。
「それは、お前の歩き方が変わったからだ。身体に、自信が出た。人間は、自信のあるなしが、一番先に歩幅に出る」
「宗介さんの、おかげです」
「俺は、服を作っているだけだ。歩いているのは、お前だ」
　そういう言い方を、いつもする人だった。手柄を、決して自分のものにしない。だが俺は知っていた。このスーツの仮縫いが始まってから、俺の姿勢は本当に変わったのだ。背筋が伸び、視線が上がった。それは服のせいだけではない。毎週、誰かに

「見られている」
「覚えられている」
　という実感が、俺を変えたのだ。
　別の日には、宗介の若い頃の話を聞いた。
「俺は、十八で師匠に弟子入りした。最初の三年は、針を持つことすら許されなかった。掃除と、糸の始末と、先輩の仕付けの解き糸。それだけだ」
「三年も」
「ああ。だが、その三年で、俺は『見る目』を鍛えられた。千人以上の身体を見た。身体は一人ずつ、全部違う。寸法の数字は似ていても、骨の形、肉の付き方、癖が違う。――晴臣。お前の身体は、その千人の中でも、指折りに美しい」
「……買い被りです」
「買い被らない。俺は、嘘の褒め言葉は使わない。使えば、鋏が鈍る」

宗介の指が、仮縫いのジャケットの、俺の肩のラインをなぞった。
「特に、この肩から背中へのラインだ。初めて見たときから、目が離せなかった。……仕事の話をして、いいか。俺はな、お前の背中を見た瞬間に、決めたんだ。この身体は、俺が仕立てるべきだと」
最初の日。衣装が裂けた日。あの騒ぎの中で、宗介は俺の背中を、そんなふうに見ていたのか。
「宗介さん」
「うん」
「俺の背中、そんなにいいですか」
「ああ。だからこそ、最初に縫ったのが、お前の背中の衣装だったのは、運命だと思う」
職人の口から

「運命」

という言葉が出たことに、俺は少し驚いた。だが宗介は、至極真面目な顔だった。

仕付けの糸は、今日も縫われては解かれた。だが俺たちの距離は、解かれることなく、少しずつ本縫いに近づいていた。少なくとも、俺はそう感じていた。

その予感は、間違っていなかった。

若い職人の青年——名は高瀬といった——と親しくなったのは、仕付けの日々の中盤だった。

高瀬は二十三歳。宗介の唯一の弟子で、黙々と作業をする好青年だった。ある日、宗介が席を外した隙に、高瀬が小声で話しかけてきた。

「白瀬さん。あの、聞いていいですか。宗介さんに、仕付けを全部やってもら

うのって、白瀬さんが初めてなんです」
「え」
「うちの店、仕付けは基本、僕の仕事なんです。先生は最後の確認だけ。でも白瀬さんの分は、最初から最後まで、先生が一人で。……この店に来て五年ですけど、こんなの初めて見ました」
その言葉は、俺の胸に深く残った。
宗介が言う
「手一杯」
という言葉の意味。その重さ。職人の、仕事の配分の全てを変えてしまうほどの、俺への執着。その執着は、重いと同時に、この上なく嬉しいものだった。
「高瀬くん。宗介さんって、普段はどんな人？」

「怖いですよ、仕事では。一ミリの誤差も許さない。でも、白瀬さんの話をするときだけ、少しだけ声が優しいんです。……あ、これ、先生には内緒にしてください」

「うん。内緒にする」

その日の仕付けで、宗介の針はいつも通り正確だった。だが俺は、その針の向こう側にあるものを、以前よりもはっきりと感じていた。

職人の手。弟子から見ても特別な、手当て。その手が、俺だけに向けられている。

帰り際、高瀬が見送りに出てきた。

「白瀬さん。また来週」

「うん。ありがとう」

店の鈴が鳴る。俺は裏通りを歩きながら、思った。この店は、宗介一人の城

ではなかった。高瀬のような若い職人の未来も、ここにはあった。その城の一角に、俺の型紙が収まっている。その事実が、俺の責任感を、静かに育てていた。

城の主の男は、俺を選んだ。ならば俺は、その選択に応える男にならなければならない。仕事でも、身体でも、心でも。

その決意は、やがて来る大きな嵐の中で、試されることになるのだが——このときの俺は、まだ、その嵐の予感すら持っていなかった。

スーツが完成したのは、契約から一月後のことだった。

濃紺の三つ揃いは、俺の身体の線を、これまで着たどんな服よりも美しく見せた。鏡の前で、思わず息を呑んだ。肩の収まり、腰の絞り、裾の落ち方。服が身体に

「謝りに来て」

いるのが、分かった。

そのスーツで臨んだ撮影で、俺は初めて、カメラマンの指名を受けた。

「白瀬くん、来月もお願いできる？」

広告の話も進み始めた。佐伯さんは言った。

「白瀬、あんたの身体、最近なんだか違って見える。服のせいだけじゃない気がするよ」。

——違って見える理由を、俺は知っていた。宗介の手だ。毎週のように身体を預け、測られ、整えられる。その反復が、俺の姿勢を変え、立ち方を変えていた。

転機は、秋のコレクションのフィッティングで来た。

仕事の衣装合わせは、当然、事務所とブランド側が行う。専属契約はあくまで宗介との個人的な話で、仕事の衣装すべてを宗介が手がけるわけではない。その日は、別のブランドのジャケットのサイズ合わせで、ブランド側の縫製スタッフが、俺の身体にメジャーを当てた。

「はい、胸囲を測りますねー」

若いスタッフの手が、俺の胸にメジャーを回した。何の感慨もない、事務

的な手つき。モデルの仕事では、何百回と経験してきたはずの光景。

なのに、俺の身体は、はっきりと拒んだ。

ぞわりと、皮膚が粟立った。メジャーの感触が、冷たく、異物だった。

「あ、すみません。ちょっと……」

「え？　あ、きつかったですか」

「いえ、大丈夫です。続けてください」

笑って乗り切った。仕事だ。拒む理由がない。けれど、はっきりと分かった。

俺の身体は、宗介の手でなければ、落ち着かなくなっていた。

その夜、定期の仕付けの日でもないのに、俺は店へ行った。宗介は裁断台で、翌日の仕事の生地を裁っていた。

「どうした。今日は予約がないはずだが」

「……ちょっと、顔が見たくて」

宗介は鋏を置いた。俺の顔を、じっと見た。
「仕事のフィッティングがあったな。今日の昼」
「なんで分かるんですか」
「お前の肩が、こわばっている。俺の前では、そんな肩はしない」
宗介は俺の背後に回り、両の掌を俺の肩に置いた。ただ置いただけだ。揉みもしない。だが、その掌の重さと熱だけで、俺の肩から力が抜けていくのが分かった。
「……宗介さん」
「うん」
「今日、別の人に採寸されて。……気持ち悪かった。宗介さんじゃないと、駄目になってました、俺」
宗介の手に、わずかに力がこもった。

「そうか」
「宗介さんのせいですよ」
「ああ。俺のせいだ」。
宗介は低く笑った。
「だが、仕方ないだろう。お前の身体は、俺が仕立てた。俺の手に合うように、俺が育てた。――他の人間の手が合うはずがない」
育てた、と言った。この男にとって、俺の身体は一着の服と同じで、そして服よりも大事な何かだった。
「責任、取ってくださいね」
「取るさ」。
宗介は俺の肩から手を離し、代わりに、俺の頬に指の背を触れた。
「――一生、採寸してやる。それでいいか」

冗談のつもりだったのかもしれない。本気だったのかもしれない。

俺は、

「はい」

と答えた。どちらでもよかった。あの夜の俺には、あの答えしかなかった。

スーツの完成後、俺の仕事は目に見えて増えた。

カタログの撮影、雑誌のグラビア、地方の百貨店のイベント。佐伯さんはほくほく顔で、

「白瀬、波が来てるよ、波が」

と繰り返した。その波に乗るたび、俺は宗介の店に報告に行った。

「今日の撮影、カメラマンに『姿勢が変わった』って言われました」

「そうか」

「服のラインがいいって、スタイリストさんにも」

「そうか」

宗介は、いつも短く答えた。だが、作業の手は止まって、俺の話を聞いている。俺は知っていた。この男は、俺の成功を、自分の手柄のように静かに喜ぶ人だった。

ある日、宗介が言った。

「晴臣。お前の仕事が増えるのはいいことだ。だが、一つだけ言っておく。――仕事先の衣装合わせで、誰に身体を触られても、仕事は仕事だ。俺は、それを咎めたりしない」

「咎めない、ですか」

「ああ。前に言っただろう。『採寸は俺以外にさせるな』と。だが、あれはあくまで『仕立て』の話だ。仕事の現場のフィッティングまで縛る権利は、俺にはない。お前はプロだ。プロの仕事を、俺の感情で邪魔はしない」

「……宗介さん」
「なんだ」
「俺、正直に言います。俺は、仕事のフィッティングでも、もう他の人の手が嫌なんです。宗介さんの手じゃないと、落ち着かない。それは、俺の気持ちです。契約とか、宗介さんの条件とかじゃなくて」
宗介は、しばらくの間、俺を見つめていた。
「……そうか」
「宗介さん？」
「いや」。
宗介は、笑った。堪えきれないような、静かな笑いだった。
「嬉しいと、こうも困るのか。——晴臣、その言葉は、台帳には付けられないな」

「心の台帳に、付けておいてください」
「ああ。すでに、付いている」
その頃から、俺の気持ちには、名前が付き始めていた。
これは、恋だ。二十七歳の俺が、三十九歳の仕立て職人に、恋をしている。
身体を預ける契約から始まった関係は、いつの間にか、身体だけの話ではなくなっていた。
だが、宗介の気持ちは、まだ分からなかった。
「お前の身体は俺のものだ」
と言う。独占欲も見せる。優しくもする。だがそれが、職人の所有欲なのか、男の愛なのか、俺には測れなかった。
測れないのは、俺の方だった。この男の寸法だけは、俺の目にも手にも、まだ届いていなかった。

スーツ完成後の仕事の中で、特に印象に残っているのは、ファッション誌のインタビューだった。

「白瀬さん、最近、急に垢抜けたと言われていますが、ご自身では何が変わったと思いますか」

記者にそう聞かれて、俺は少し考えてから答えた。

「服に、身体を合わせるのをやめたんです。身体に、服を合わせてもらう側に回った。……信頼できる、仕立て職人に出会って」

記事には、その言葉がそのまま載った。

「仕立て職人」

という単語が、俺の名前の横に並んだ。雑誌を買って、俺はその頁を宗介に見せた。

「……俺のことは、伏せてくれてよかったのに」

「伏せてませんよ。名前は出してないけど、存在は出しました。俺の今の身体は、宗介の仕事の成果ですから。それを隠すのは、嘘になる」

宗介は、雑誌を静かに閉じた。

「晴臣。俺は、表に出るのが苦手だ。だが……お前の言葉の中に、俺がいるのは、悪くない気分だ」

「でしょう」

「ああ」

そのインタビューの反響で、俺には初めて、テレビの情報番組のファッションコーナーへの出演話が来た。生放送。服を紹介する短いコーナーだったが、俺にとっては初めてのテレビだった。

本番の日。スタジオの空気は、撮影現場ともランウェイとも違った。照明の熱、秒単位で進む進行表。緊張で、指先が冷たくなった。

だが、本番直前、宗介からの連絡が入った。

『緊張したら、背筋を伸ばせ。お前の背中は、俺が保証している』

その一行で、俺の指先に血が戻った。

本番は、無事に終わった。いや、無事どころか、共演の司会者に

「白瀬さん、立ち姿が本当に綺麗ですね」

と言われた。放送後、事務所には好意的な反応が何件も届いた。

夜、店に行くと、宗介が言った。

「見たぞ。録画で」

「……どうでした」

「悪くなかった。だが、袖の位置が三ミリ、ずれていた」

「テレビ局の衣装ですからね、吊るしです」

「分かっている。文句は、局には言わない」。

宗介は、少しだけ笑った。
「だが、次にテレビに出るときは、俺の服で出ろ。袖の三ミリも、許さん」
「はい。――宗介」
「うん」
「いつか、俺が大きな番組に呼ばれたら、そのときは一番いい一着を、お願いします」
「ああ。約束しよう」
仕事は、確実に広がっていた。波は、来ていた。だが俺は、その波の全てが、銀座の裏通りの小さな仕立て部屋から始まっていることを、片時も忘れなかった。

その夜のことは、順番を追って思い出すことができない。断片だけが、身体の中に残っている。

店を閉めた後の仕立て部屋。鈴の音はもう鳴らない。カーテンの向こうの銀座の灯りは遠く、部屋にはランプの暖色だけがあった。

発端は、宗介の言葉だった。新しいドレスシャツの仕付けを終えたあと、宗介は俺の手首を測りながら、ぽつりと言った。

「白瀬。お前は最近、俺の前に立つときだけ、呼吸が変わる」

「……」

「緊張じゃない。期待の呼吸だ。俺は身体を三十年、見てきた。嘘はつけないぞ」

否定できなかった。宗介の手が俺の手首を離さない。その指が、俺の脈を拾っていた。脈は、正直だった。

「宗介さん」

「聞くぞ。お前の言葉で」

「……俺は」

言葉を探した。モデルの俺は、カメラの前でなら何だって演じられる。けれどこの男の前では、取り繕う服が一枚もなかった。

「俺は、宗介さんに触られたいんです。測るためじゃなく。……そういう意味で」

沈黙が落ちた。宗介は動かなかった。やがて、俺の手首を握る手に、力がこもった。

「白瀬晴臣」

「はい」
「俺は三十九だ。お前は二十七。十二も違う」
「知ってます」
「俺は、お前の身体を預かっている側だ。その立場で手を出す男を、世間は信用しない」
「宗介さん」
「なんだ」
「俺が言ったんです。俺の言葉です。……宗介さんは、いつも言いますよね。言葉に出されたものしか信じないって。だから言いました。触ってください。測るためじゃなく、俺を」
宗介は、長い間、俺を見ていた。それから、首のメジャーを外して、裁断台に置いた。かたり、と小さな音がした。職人の証を、外す音だった。

「……分かった。ここからは、職人としてじゃない。一人の男として、お前を抱く」
「はい」
「だが、約束しろ。嫌になったら、どんな最中でも言え。『やめろ』と言えば、俺は即座に止まる。それだけは、この先も変わらない」
「約束します」
宗介の手が、俺のシャツの釦にかかった。一つずつ、丁寧に外す。仕付けの仮縫いを解くときと同じ、丁寧な手つきだった。
「綺麗な身体だ」
「……モデルですから」
「違うな。モデルとしてだけなら、俺の店の顧客は他にもいる。お前の身体は、お前だから綺麗なんだ。骨の形、筋肉の付き方、皮膚の張り。全部を、俺は知っ

ている。寸法まで、俺のものだ」

シャツが落ちた。宗介の掌が、俺の胸に触れた。測るための手ではなかった。確かめるための手でもなかった。求める手だった。掌の熱が、皮膚を通して直接、俺の内側に届いた。

「あ……」

「我慢するな。声は出していい。この部屋は、防音だ」

宗介の唇が、俺の首筋に触れた。喉仏の横、メジャーが通った場所。昼間の採寸の記憶と重なって、俺の背筋が震えた。

「ここだ。お前は、ここに触れられると震える。何度も測って、知っている」

「宗介さん、ずるい……」

「ずるくていい。俺は、お前の身体の全部を知っている男だ。他の誰にもできないやり方で、お前を抱ける」

抱き寄せられた。宗介の身体は、服の下でも大きかった。胸板の厚さ、腕の太さ。三十九歳の男の、鍛え抜かれた職人の身体。俺はその腕の中で、初めて

「包まれる」

ということを知った。

キスは、深かった。今までの人生で、誰ともしたことのない種類のキスだった。求める側の熱と、与える側の余裕が、同時にあった。

台の上の生地を、宗介は素早く片付けた。俺を、裁断台に座らせた。生まれて初めて、仕立て部屋の神聖な台の上で、俺は男に抱かれた。

「痛くしたら、言え」

「はい」

「怖いか」

「……少し。でも、宗介さんなら」

「いい返事だ」
宗介の手が、俺の下着に触れた。ゆっくりと下ろす。俺の身体が、ランプの光の中に晒された。恥ずかしさよりも先に、昂ぶりが来た。だって、この男はすでに、俺の全部を測り尽くしていた。隠すものなど、最初からなかったのかもしれない。
「晴臣」
初めて、名前で呼ばれた。
「宗介さん……」
「俺も、名前で呼べ」
「……宗介」
宗介の身体が、俺に重なった。指が、入ってきた。丁寧に、ほぐすように。俺の反応を一つずつ確かめながら、職人が生地の目を読むように、俺の身体の

声を読んでいく。
「っ、あ……」
「ここだな。分かった。――逃げるな。俺から、逃げるな」
逃げるつもりなど、なかった。俺は宗介の背中に腕を回した。広い背中。汗の気配。指先が、もっと奥へ。俺の身体は、自分でも知らなかった場所で、宗介の指に応えた。
「声が、いい。もっと聞かせろ。誰にも聞かせたことのない声を、俺だけに」
「宗介……宗介、あ……っ」
やがて宗介自身が、俺の中に入ってきた。熱い、質量のある圧迫。痛みは、一瞬だけだった。宗介は止まって、俺の顔を覗き込んだ。
「大丈夫か」
「……大丈夫。進んで」

「嘘じゃないな」
「嘘じゃ、ない。……来て、宗介」
動き始めた宗介は、昼間の静かな職人とは別人だった。だが、乱暴ではなかった。一突きごとに俺の反応を読み、角度を変え、深さを変える。この男は、俺の身体の寸法を知り尽くしている。どこに触れれば俺が崩れるかを、全部、知っていた。
「晴臣、お前は、俺のものだ」
「あ……」
「他の誰にも、測らせない身体だ。寸法まで、俺だけのものだ。――言え。お前の口で」
「俺は……宗介の、ものです……っ」
「よく言えた」

宗介の動きが、深くなった。裁断台が、かすかに軋んだ。俺は宗介の腕にしがみついた。背中の肩甲骨のあたり、かつて衣装が裂けて、この男が縫ってくれた場所。あの日から、俺の身体はこの男のものになり始めていたのだ。

「宗介、宗介……あ、もう……」

「いい。俺の中で、果てろ。誰にも見せたことのない顔を、俺に見せろ」

限界は、すぐに来た。視界が白く弾けた。俺は宗介の名を呼びながら、震えた。宗介も、俺の名を呼んだ。晴臣、と。低く、掠れた声で。俺の中で、宗介が果てるのが分かった。

長い、長い余韻があった。

宗介は、すぐに離れなかった。俺を抱いたまま、背中を撫で続けた。汗を、タオルで拭ってくれた。温かいお茶を淹れてくれた。ソファに座らせ、毛布をかけてくれた。

「……職人って、事後まで丁寧なんですね」
「職人だからじゃない」。
宗介は、俺の隣に座って、自分の分の茶を啜った。
「晴臣だからだ。――お前は、俺が初めて、メジャーを外して抱いた相手だ」
「え」
「預かった身体に、職分を越えて手を出すな。それが、師匠の教えだった。三十年、守ってきた。……破ったのは、お前が初めてだ」
俺は、毛布の中で身を起こした。
「……いいんですか。そんな大事な掟」
「お前が『触ってください』と言ったんだ。言葉に出された願いは、叶えるのが俺の流儀だ」。
宗介は、俺の髪を一房、指に絡めた。

「ただし、晴臣。これで関係が変わる。俺は、お前の恋人にもなった。採寸の手は、これからもっと遠慮がなくなるぞ」

「……望むところです」

俺は笑った。身体の芯に、まだ宗介の熱が残っていた。けれどそれ以上に、胸の奥が温かかった。

求められた。選ばれた。そして、事後の茶の温かさまで含めて、俺はこの男に大事にされていた。

その夜、俺は初めて、宗介の腕の中で眠った。仕立て部屋の奥の、小さな仮眠室だった。寝息を立てる三十九歳の男の隣で、俺は思った。

この先、この関係がどこへ行くのかは分からない。だが少なくとも今夜、俺の身体も心も、この男のものだった。

翌朝。俺が目覚めると、宗介はもう起きていて、台所で朝食の支度をして

いた。

卵焼きの匂い。味噌汁の湯気。昨夜のことが夢ではなかったことが、その日常の匂いで分かった。

「……おはよう、ございます」

「晴臣。おはよう」。

宗介は、焼き魚を皿に移しながら言った。

「身体は、痛くないか」

「大丈夫です。ちょっと、だるいくらい」

「初めてだったからな。今日の仕事は、夕方からのはずだ。午前は休め。——飯を食ったら、風呂に入れ。身体を温めた方が、筋肉がほぐれる」

至れり尽くせりだった。食卓に座ると、宗介が向かいに座った。二人で、静かに飯を食べた。

「宗介」
「うん」
「昨日のこと、後悔してないですか。……師匠の、教え」
宗介は、箸を置いた。
「後悔は、していない。だが、言っておくことがある」。
宗介の灰青の瞳が、俺を真っ直ぐに見た。
「晴臣。俺は、一度抱いた相手を、軽く扱う男じゃない。お前との関係は、昨夜から『本物』になった。採寸の契約も、恋人としての付き合いも、両方、本気でやる。その代わり、お前にも本気でいてもらう。他の男に、身体の『それ以外』の部分を、安売りするな」
「しません」
「言葉だけじゃなく、態度でな」

「はい。――宗介こそ」
「俺か」。
宗介は笑った。
「俺には、お前以外の『手一杯』はいない。三十年、誰にもメジャーを外して抱いたことはないと、言ったはずだ」。
宗介は、俺の手の甲に、自分の手を重ねた。
「お前が、最初で、おそらく最後だ」
「おそらく、って」
「未来のことは、断言しないのが俺の流儀だ。だが、今の手で約束できることは、約束する。――晴臣、俺はお前を、大事にする」
湯気の向こうで、宗介の顔が少し霞んで見えた。俺は、
「はい」

と答えた。胸の奥が、温かくて、少し痛かった。
その日から、俺たちは本当の意味で、二人になった。
恋人になって最初の週末、俺は風邪を引いた。
撮影の合間に雨に打たれたのが悪かった。熱が三十八度を超え、事務所の寮の部屋で一人、うなされていた。夕方、携帯に宗介から連絡が入った。『今日は店に来る日だったな。どうした』。返信する指も重かったが、『風邪です。今日は行けません』とだけ打った。
三十分後、玄関の呼び鈴が鳴った。
「……宗介？」
扉を開けると、買い物袋を両手に下げた宗介が立っていた。食材と、薬と、スポーツドリンク。
「住所は、契約書に書いてあった。勝手に来た。怒るなら、熱が下がってから

怒れ」

「怒りません……よく、来てくれました」

宗介は、慣れた手つきで台所に立ち、粥を炊き始めた。白い粥に、梅干しを一つ。熱のある身体に、水分と塩分。

「食えるだけ、食え。残りは冷蔵庫だ」。

「宗介って、本当に何でもできますね」

「一人暮らしが長いだけだ」。

宗介は、冷たいタオルを俺の額に乗せた。

「――晴臣。お前は、具合が悪くなっても、人を呼ばないタイプだな」

「……慣れてますから。一人で」

「その『一人で』を、卒業しろ」。

宗介は、ベッドの脇に座った。

「俺がいる。具合が悪いときは、俺を呼べ。それも、契約のうちだ。台帳には書いていないが、俺の契約には入っている」

熱のせいだけではない。目頭が熱くなった。十九歳で上京してから、風邪を引くたび、俺は一人で寝ていた。看病してくれる人など、いなかった。電話をかけられる人も、いなかった。

「……ありがとう」

「礼は、元気になってから。寝ろ。朝まで、ここにいる」

宗介は、ベッド脇の椅子に座って、本を読み始めた。時々、冷えたタオルを替えに立ち上がる。夜中の二時、俺が目覚めたときも、宗介は同じ椅子にいた。少しだけ、舟を漕ぎながら。

「宗介。ベッド、半分使ってください。狭いけど」

「……いいのか」

「いいです。俺の看病の、お礼の代わり」

宗介は、遠慮がちにベッドの端に横になった。熱のある俺の身体に、宗介の掌がそっと置かれた。腹の上。まるで、寸法を確かめるような、優しい置き方だった。

「腹の張りが、落ち着いてきた。熱も、峠を越えたな」

「宗介は、掌が医者みたいですね」

「職人だ。身体の変化は、手で読む」

その掌の温かさに守られて、俺は深い眠りに落ちた。朝、熱は下がっていた。

台所には、朝食用の支度と、置き手紙があった。『昼の分も冷蔵庫にある。無理をするな。今日の撮影は、事務所に連絡して代わってもらえ。俺からも言っておく――宗介』。

俺は、その走り書きの文字を、しばらく見つめていた。

「預かる」

という言葉の意味を、俺はこの朝、ようやく身体で理解した。身体を預かるというのは、寸法を測ることではない。その身体が、弱ったとき、傷んだとき、責任を持って守るということだ。

この男に預けた身体は、安全なのだ。その安全の上で、俺は初めて、自分の足で、もっと遠くへ歩いていける気がした。

あとになって、宗介から聞いた話がある。あの夜、宗介は

「恋人の看病」

をしたのが、人生で初めてだったそうだ。三十九年間、この男は、誰の額にもタオルを乗せたことがなかった。

「お前は、俺の『初めて』を、いくつも持っていくな」

宗介は照れたように笑った。

「いいでしょう。俺の初めても、たくさん宗介のものですから。お互い様です」

恋人になってから、俺はもう一つ、宗介の新しい顔を知った。

俺の仕事の写真を、宗介は密かに集めていたのだ。雑誌の切り抜き。広告のチラシ。それらが、店の奥の引き出しに、ファイルされて保管されていた。

見つけたのは、偶然だった。道具を探す宗介の手伝いをしていたとき、そのファイルが目に入った。

「宗介。これ……」

「……見たか」。

宗介は、少しだけ、ばつが悪そうにした。

「仕事の参考資料だ。お前の身体の変化を、写真でも追っている。職人として、当然の――」

寸法まで俺のもの。

「職人として、ですか」
「……恋人として、でもある」
宗介は、観念したように言った。
「お前の載る雑誌は、全部買っている。表紙じゃなくても、買っている。本屋で、店員に『このモデルさんのファンですか』と聞かれたこともある。『担当の職人です』と答えたがな」
俺は笑い出してしまった。三十九歳の、不器用な男の愛し方が、あまりにまっすぐで。
「宗介。ありがとう」
「笑うな」
「笑ってません。嬉しいんです」
「……そうか」

その日の夜、俺は宗介のファイルを、一頁ずつ眺めた。俺の、デビュー当時に近い写真もあった。契約をする前の、既製品の服を着た、少し頼りない立ち姿の俺。その写真の余白に、宗介の字で、メモが書いてあった。

『肩の線が服に負けている。この男には、仕立てが必要だ』

出会う前から、この男は俺を見ていた。ショーの控室で初めて見た、と言っていたが、正確には、その前から、雑誌の中で俺を見つけ、目を留めていたのだ。

「宗介。最初の日、『数ヶ月前に別の現場で見た』って言いましたよね」

「ああ」

「本当は、もっと前から、俺を知ってたんじゃないですか」

宗介は、しばらく黙っていた。

「……去年の春だ。雑誌の片隅のお前を見た。服に着られている若いモデル

だった。だが、背中のラインだけは、忘れられなかった。あの現場で再会したとき、俺は確信した。――この身体は、俺のところへ来るべきだと」

一年以上も前から。この男は、俺の身体を見て、俺を待っていた。

選ばれるということは、こういうことなのか。俺の知らないところで、俺の物語は、すでに始まっていたのだ。

「宗介」

「うん」

「俺、あんたに出会えて、本当によかった」

「……俺もだ、晴臣」

ファイルは、その後も増え続けた。俺の新しい仕事の写真が、その都度、宗介の手で切り抜かれ、収められていく。俺のキャリアの記録は、事務所の資料室と、この仕立て部屋の両方に、積み重なっていった。

恋人になってから、仕付けの意味が変わった。

宗介の手が俺の身体に触れるたび、そこには職人の確認と、男の欲望が、半分ずつ混ざるようになった。俺もまた、宗介の前で服を脱ぐことに、羞恥とは別の熱を感じるようになった。

「今日は、シャツの本縫いの前の、最後の仕付けだ」

「はい」

「シャツを脱げ。パンツもだ。肌着一枚で、ラインを見る」

言われるままに脱ぐ。仕立て部屋の鏡の前。宗介は腕組みをして、俺の全身を眺めた。値踏みする目ではなかった。愛でる目だった。

「……腹筋の線が、前より際立ってきた。食事は、ちゃんと摂っている

か」

「宗介が作ってくれるから」

そう。恋人になってから、宗介は店の奥の小さな台所で、俺に飯を作るようになった。仕付けの合間の、簡単なもの。だが、栄養の計算までされた、職人仕事の飯だった。

「お前の身体は、俺の素材でもある。粗末なものは食わせない」。

「ふむ。では、体重は維持できている。いい身体だ、晴臣」

「採寸係の評価ですか、恋人の感想ですか」

「両方だ」。

宗介は近づいて、俺の腰に手を回した。

「――今日は、仕事の前に、一つ確認したい」

「なんです」

「俺の嫉妬の処理の仕方だ」
宗介の手が、俺の腰から背へ滑った。
「昨日の撮影、若い男のモデルと一緒だったな」
「……見てたんですか」
「雑誌の速報写真でな。その男、お前に随分と馴れ馴れしかった」
「仕事ですよ。ポーズの指定で、肩を組んだだけ」
「分かっている。頭ではな」。
宗介の腕に力がこもった。
「だが、晴臣。俺はお前の身体の寸法を知っている唯一の男だ。その身体に、他の男の手が触れている写真を見ると、ここのところが、落ち着かない」
宗介は自分の胸を、拳で軽く叩いた。
「三十九にもなって、笑うだろう」

「笑いません」

俺は、宗介の手を取って、自分の胸に当てた。

「宗介。俺の身体に触れていいのは、仕事を除けば、宗介だけです。……採寸も、それ以外も」

「仕事以外、か」

「仕事以外です。――だから、安心してください」

宗介は、しばらく俺の心臓の音を掌で聞いていた。それから、静かに息を吐いた。

「……落ち着いた。すまない、晴臣。俺の執着は、重いぞ」

「知ってます。寸法まで俺のもの、って人ですから」

「分かっているなら、いい」

その日の仕付けは、いつもより長かった。宗介は俺の身体のあちこちを、

いつもより多く触れて、いつもより多く確認した。そして仕付けが終わったあと、俺たちは仮眠室のベッドに倒れ込んだ。

「晴臣」

「ん」

「シャツの仕上がりは、三日後だ。そのシャツを着て、俺の前に立ってくれ。他の誰の目にも触れる前に、最初は俺だ」

「はい。最初は、宗介です」

夜の仕立て部屋は、二人の部屋になっていた。採寸の手は、恋人の手になった。それでも宗介は、肝心なところで必ず止まった。

「いいか」

と聞く。

「続けるか」

と聞く。その確認の積み重ねが、俺には何よりも愛おしかった。

この男は、俺を奪わない。俺に、選ばせ続ける。選ばせた上で、執着する。

重い男だった。けれど、その重さは、俺を縛る鎖ではなく、錨だった。売れかけのモデルの、漂うような日々の中で、宗介だけが、俺を一つの場所に繋ぎ止めてくれた。

恋人としての日々は、穏やかで、濃かった。

宗介は、俺の生活の隅々に、静かに入り込んできた。食事の管理。睡眠時間の管理。

「撮影前日は、二十三時までに寝ろ。目の下の隈は、寸法には出ないが、写真には出る」。

二十代の頃なら窮屈に感じたかもしれない。だが二十七歳の俺には、その管理が、愛情の形として心地よかった。

寸法まで俺のもの。

ある金曜の夜。新しいシャツが仕上がり、俺はそのシャツを着て、宗介と二人、店の近くの小さな店で食事をした。恋人になって、初めての外食だった。

「宗介って、外で飯を食べると、やっぱり職人の目になるんですね。今、店員さんの制服の縫い目、見てましたよね」

「……癖だ。許せ」

「許しますけど。——ねえ、宗介。今度、休みの日に、どこか行きませんか。店の外で、丸一日」

「考えておく」

店に戻る夜道。銀座の裏通りは、人通りが少なかった。宗介は、歩きながら、自然な仕草で俺の手を取った。三十九歳の男の、大きくて温かい手。誰に見られるわけでもない路地で、俺たちは手をつないで歩いた。

「宗介」
「うん」
「今日は、泊まっていい？」
「……ああ」
仕立て部屋の奥。仮眠室のベッドは、二人には少し狭かった。だが、その狭さがよかった。
宗介は、俺のシャツの釦を外した。今夜のシャツは、宗介自身が仕立てたものだった。
「俺の服を、俺が脱がせる。変な気分だ」
「変ですか」
「いや。――嬉しい、気分だ。この服は、お前の身体のために生まれた。それを脱がす権利も、俺だけのものだ」

宗介の手が、俺の肌を辿った。もう遠慮はなかった。だが、肝心なところでは今夜も止まった。

「晴臣。今夜も、いいか」

「……聞かなくても、分かるでしょう」

「聞く。言葉で、聞くのが俺たちだろう」

「いいです。来て、宗介」

宗介の身体が、俺を包んだ。馴染んだ熱。馴染んだ重さ。だが、昂ぶりは初めてのときより深かった。互いの身体を知り尽くした者同士の、遠慮のない求め合いだった。

「晴臣、お前は、抱くたびに綺麗になるな」

「宗介の、手柄ですよ……あっ」

「ああ。俺の手柄だ。誰にも、手柄は譲らない」

宗介の独占の言葉は、俺の身体の芯を熱くした。求められている。選ばれている。その実感が、快感と重なって、俺を押し上げた。

「宗介、好き……大好きです」

「ああ。俺もだ、晴臣。――もっと、俺だけを見ろ」

その夜の俺たちは、長い時間をかけて愛し合った。果てた後の宗介は、俺の汗を拭い、水を飲ませ、背中を撫でて眠らせてくれた。その

「いつもの」

手際が、どれほど幸せなことか。俺は宗介の腕の中で、穏やかな眠りに落ちた。

――この穏やかさが、ずっと続けばいい。そう願いながら。

だが、幸せな日々というのは、たいてい、次の波の静けさでしかないのだった。

宗介の誕生日は、秋の終わりにあった。三十九歳の誕生日。

俺は、プレゼントに何ヶ月も悩んだ。職人に道具を贈るのは難しい。その道の素人が選んだ道具など、宗介の目には適わないだろう。考え抜いた末に、俺が用意したのは、革の小さなケースだった。メジャーを入れるための、専用のケース。老舗の革工房で、宗介の愛用のメジャーの寸法に合わせて、特注で作ってもらった。内側には、イニシャルの刻印を入れてもらった。

「宗介。誕生日、おめでとうございます。これ」

宗介は、ケースを開けて、長い間、黙っていた。自分のメジャーを取り出し、ケースに収めてみた。寸法は、ぴたりと合った。

「……俺のメジャーの長さを、なぜ知っている」

「測りました。宗介が寝てる間に、こっそり。——採寸は、宗介の専売特許かもしれませんけど、今日だけは許してください」

宗介は、ケースを大事そうに撫でた。
「三十九年、生きてきて。誕生日を、こうして祝われたのは……何年ぶりだろう」
「え」
「師匠が生きていた頃は、店で祝ってもらった。その後は、一人で、静かに年を取るのが普通だった」。
宗介は、目を細めた。
「晴臣。ありがとう。これは、俺の宝にする」
「喜んでもらえて、よかった」
「お返しを、させてくれ」。
宗介は、立ち上がって、奥から小さな箱を持ってきた。
「実は、俺も用意していた。お前の、新しい仕事が決まった祝いだ」

箱の中には、万年筆が入っていた。深い緑の軸。宗介の言葉が、添えてあった。

「契約書に、サインをするときの筆だ。これから先、お前は自分の意思で、たくさんの契約にサインをするだろう。そのたびに、思い出してほしい。自分の意思で選ぶことの、重さと誇りを」

俺は、万年筆を握りしめた。

「……宗介。俺、この筆で最初にサインするのは、大きな仕事の契約にします。あんたの言葉通り、自分の意思で選んだ仕事に」

「ああ。それがいい」

その夜の食卓は、いつもより少しだけ豪華だった。宗介が腕を振るったのだ。食事の後、二人は並んで、仕立て部屋のソファに座った。

「宗介。三十九歳の抱負は？」

「抱負、か」。
宗介は、少し考えて言った。
「お前を、もっと大きな舞台に立たせることだ。そのために、俺は腕を磨く。――若い頃は、自分の名のために腕を磨いた。今は、お前という人間のために磨く。それが、悪くない」
「俺も、抱負を言っていいですか」
「言え」
「四十歳になる宗介を、来年も祝うこと。五十歳も、六十歳も。俺の寸法を測り続ける人の、誕生日を、俺はずっと祝い続けます」
宗介は、黙って俺の手を取った。その大きな手が、俺の指を包んだ。
「……約束だな」
「はい。約束です」

穏やかな夜だった。外では、銀座の街が静かに更けていった。俺たちは、この穏やかさが、永遠に続くような気がしていた。

あの大きな話が、俺たちの穏やかさを試しに来るのは、そのすぐ後のことだった。

話が来たのは、冬の初めだった。

佐伯さんが、目を輝かせて事務所の会議室に俺を呼んだ。

「白瀬！　大きな話が来たよ！　アパレル大手の『ノール』が、来季からイメージモデルを探していて、あんたに目を付けたんだって！　専属契約、二年。広告の全国展開付き。ギャラは今の何倍にもなるよ！」

ノール。誰もが知る、大手アパレルブランドだった。二十七歳の売れかけモデルにとって、垂涎どころではない。一生に一度の、掴めるかどうかで人生が変わる話。

「すごいじゃないですか……！」

「だろ！　ただし、条件があるんだ」。

佐伯さんは資料を広げた。
「ノールの専属になると、衣装は全部、ノール側の契約テーラーが担当するんだって。ブランドの統一感のため、私物のオーダーも制限される。仕立ては、ノールの指定する工房で、専属チームが採寸から管理まで全部やるそうだ」
俺の、笑顔が固まった。
「……採寸も、ですか」
「そりゃそうだよ。専属モデルだもの。あんたのサイズデータは、ブランド側が一括管理する。まあ、当たり前の話だよね」
当たり前の話だった。モデルの世界では、ごく普通の条件だった。
だが、俺には当たり前ではなかった。
「少し、考えさせてください」

「え？　考える？　白瀬、こんな話、待ってくれないよ？」
「分かってます。でも、一日だけ」
事務所を出て、俺は真っ直ぐには店に行けなかった。銀座の街を、一時間も歩いた。
ノールの専属になれば、俺のモデル生命は延びる。いや、延びるどころか、開ける。二十七歳の瀬戸際から、一気に表舞台へ行ける。
だがその代わり、俺の身体は、ノール側の専属チームに預けることになる。採寸は、他人がする。仕付けは、他人がする。宗介の手は、俺の身体から離れる。
――契約書の条文を思い出した。
「甲は期間中、第三者に採寸を委ねない」。
それだけじゃない。あの条文の下にある、宗介の本音を、俺は知っている。

自分の手を離れたら、この身体は誰のものになるのか。その不安と闘いながら、この男は俺を抱いてきた。

俺は、どうしたいんだろう。

金も、名声も、欲しい。モデルとして、認められたい。それは本当だ。

だが――。

携帯電話が鳴った。宗介からだった。

『今日、店に来る日だったな。待っている』

短い文面。俺はその文字を見て、足が勝手に裏通りへ向かうのを感じた。

店に着くと、宗介はすでに、俺のシャツの本縫いを終えて、アイロンをかけていた。

「来たか。……顔が暗いな」

「宗介」

「うん」
「話が、あるんです」
俺は、ノールの専属話を、包み隠さず話した。専属チームのこと、採寸の条件のこと、ギャラのこと、モデルの将来のこと。宗介は、アイロンを止めて、黙って最後まで聞いた。
「……なるほど」
「宗介、俺は」
「晴臣」。
宗介は、俺の言葉を遮った。
「一つ、確認させてくれ。この話、お前は、どうしたいんだ」
「……分からないんです。だから」
「分からないのなら、今日は決めるな」。

宗介は立ち上がり、仕上がったシャツをハンガーにかけて、俺の前に差し出した。

「ほら。お前のシャツだ。着てみろ。最初に見るのは、俺だと約束しただろう」

俺はシャツを着た。白い、ドレスシャツ。寸法は寸分も違わなかった。鏡の中の俺は、少しだけ、大人の男に見えた。

「……よく似合う」

「宗介」

「この話は、俺の都合で決めるな。お前のモデルとしての命が懸かっている。俺の執着のために、お前の未来を縫い縮めるようなことは、したくない」

「ですが、契約は……」

「契約書の話は、後だ。まず、お前自身の答えを出せ。お前がノールを選ぶなら、俺は契約を解除して、お前を送り出す。それが、預かってきた側の責任だ」

宗介の声は、静かだった。静かすぎた。灰青の瞳は、俺を見ていなかった。自分の手の甲を、じっと見ていた。

職人の手。俺の身体を覚えた手。

その手が、小さく、震えている気がした。

シャツを仕上げた後の数日間、俺は答えを出すために、自分と向き合い続けた。

事務所の先輩モデルに、それとなく聞いてみたこともある。

「専属契約って、どうですか」。

先輩は笑った。

「最高の安定だよ。若いうちはいいけど、俺らくらいの歳になると、専属の声が掛かるだけで奇跡だ」。

奇跡。そのとおりだった。ノールの話は、奇跡の類だった。

だが、奇跡と幸せは、別の話なのだと、俺はこの数ヶ月で学んでいた。
ある夜、俺は自分の部屋で、デビュー当時からの資料を引っ張り出した。
十九歳でこの世界に入って、八年。たくさんの服を着て、たくさんの人間に測られてきた。その全ての時間の中で、
「自分の身体を、自分だ」
と感じたのは、いつだっただろう。
答えは、明白だった。宗介と出会ってから、だ。
契約書も、もう一度読み返した。
「甲はいつでも、一方的な意思表示で本契約を解除できる」。
宗介が作った、あの条文。俺を縛らないための条文。俺の自由を、最初から保障してくれていた条文。
その条文があるからこそ、俺は知っていた。宗介は、俺を

「縛って」

引き止める気がない。俺が残るとすれば、それは俺自身の意思で選んだときだけだ。

だからこそ、その選択には意味があるのだと思った。

縛られて残るのと、自由の中で選んで残るのでは、まるで違う。宗介は、後者の形でしか、俺を欲しがらない男だった。その潔さが、俺の心をさらに強く掴んだ。

――俺は、どうしたい。

自問は、もう形を変えていた。

「どうすれば得か」

ではなかった。

「俺は、誰の手に、自分の身体と人生を委ねたいか」。

それが、問いの核心だった。

携帯の画面に、宗介からの短い連絡が入った。

『明日の仕付けは、予定通り十九時。シャツの最終確認もする』

何事もないような文面。だが俺には分かった。この男は、俺の答えが出るまで、何事もなかったような顔で、俺の服を作り続けるつもりなのだ。それが、この男の愛し方なのだ。

俺は、画面を見つめて、静かに息を吐いた。

答えは、もう出ていたのかもしれない。後は、それを言葉にする勇気だけだった。

答えを出す前に、俺は一人だけ、会って話を聞きたい人がいた。

事務所の先輩で、数年前に大手ブランドの専属になったことのある、歳の離れたモデルだった。喫茶店で、その先輩は笑いながら言った。

「専属は、楽だったよ。仕事は安定するし、衣装も全部、向こう持ち。サイズ管理も、向こうがやってくれる。『はい』って言えば、全部進む」
「いいことずくめじゃないですか」
「ああ。――でもな、白瀬。三年で辞めた」
「なぜです」
先輩は、コーヒーを一口啜って、窓の外を見た。
「身体が、自分のものじゃなくなったんだよ。体重も、髪型も、爪の長さまで、全部『ブランドの資産』として管理される。楽なんだけど、息が詰まる。俺はモデルである前に、一人の男でいたかった。……お前は、どうしたいんだ」
「俺は……」
「顔に出てるぞ」。
先輩は笑った。

「お前には、もう『自分の身体』を大事にしてくれる場所があるんだろう。羨ましいよ。その場所を守るために、大きな話を蹴る奴がいても、俺は笑わない」

帰り道、俺は銀座のほうへ足を向けていた。店には行かなかった。今日は、まだ行かない。答えを持たずに行くのは、宗介に失礼だと思った。

代わりに、自宅で鏡の前に立った。服を脱ぎ、自分の身体と向き合った。百八十四センチの、二十七歳の身体。肩幅四十四、胸囲九十五、胴回り七十八、腿五十六。この数字たちは、宗介に出会う前から、俺の身体に付いていたはずの数字だった。だが、意味は違った。出会う前、この数字は

「商品のスペック」

だった。今、この数字は

「俺の物語」

だ。努力の跡であり、選ばれた証であり、誰かの手の記憶だ。

俺は、この物語を、他人に引き継がせることができるか。

答えは、もう身体の方が知っていた。他の誰かのメジャーが首筋に触れる場面を想像すると、皮膚がざわりとした。あのフィッティングの日の、拒絶反応。あれが、俺の本心だった。

だが、それでも俺は、一晩、布団の中で自問を続けた。

金。名声。将来の安定。モデルとしての命。それらを捨てることが、本当に正しいのか。宗介への気持ちは、一時の高揚ではないのか。

考えて、考えて、夜が更けて。それでも、最後に残る光景は、いつも同じだった。

裁断台の前で、俺の服を縫う宗介の背中。俺の涙を拭う、節くれ立った指。

「言葉に出されたものしか、信じない」

と言う、律儀な男の横顔。
そして、あの震える手。
――この男を、失いたくない。その一文が、俺の全ての計算を、静かに上書きした。
金は、また稼げばいい。名声は、遠回りでも掴みにいけばいい。だが、この男の手は、この世に一組しかない。代わりは、どこにもない。
二十七歳の俺が、人生で初めて
「代わりの利かないもの」
に出会っていた。
その夜、俺はようやく、深く眠れた。答えが決まった人間の、深い眠りだった。

その夜、宗介は妙に饒舌だった。

飯を作り、茶を淹れ、来季の生地の話をした。笑ってもいた。だが俺には分かった。この男は、傷ついているときにほど、穏やかになる人だった。

「宗介」

「うん」

「ノールの話、事務所は週明けに返事が欲しいって」

「そうか」

「宗介は、本当にいいんですか。俺が、向こうの専属チームに採寸されること」

宗介は、茶碗を置いた。長い沈黙があった。

「……よく、ない」

ぽつりと、それだけ言った。

「よくないに、決まっている。晴臣。俺は、お前の肩幅も、胸の厚みも、腰の落ち方も、全部この手で知っている。眠っているときのお前の呼吸の深さまで知っている。その身体を、他の男――いや、女でも、他人が測るというだけで、俺は……」

宗介は言い淀み、自分の拳を握った。

「だが、それとこれとは別だ。お前の人生だ。二十七のお前の、たった一度の好機だ。俺の感情で、お前の翼を縫い止める権利は、俺にはない」

「宗介……」

「だから、決めるのはお前だ。俺は、どちらの答えでも受け入れる。――ただ

し」

宗介は俺の手を取った。大きくて、温かい手。職人の、節くれ立った手。

「ただし、もしお前がノールを選ぶなら。最後にもう一度だけ、俺に測らせてくれ。今の晴臣の寸法を、全部。この手で、最後の記録を付けさせてくれ。それが、俺の我儘だ」

泣きそうになった。

この男は、俺を引き止めない。縋らない。契約書を持ち出さない。その代わり、

「最後に測らせてくれ」

とだけ言う。執着の深さが、その我慢の深さに比例していた。

「……分かりました」

その夜の採寸は、これまでで一番、長かった。

寸法まで俺のもの。

宗介は、いつものように下着一枚の俺を台に立たせ、一つずつ、寸法を読み上げては、台帳に記していった。足首、ふくらはぎ、膝、腿、腰、腹、胸、肩、首、二の腕、手首。何度も繰り返し測ってきた数字たち。だが今夜の宗介の手は、数字を確認するための手ではなかった。

「腿、五十六。変わらないな」

指が、俺の腿の内側を、ゆっくりと撫でた。測る、という行為の外側で。

「宗介……それは、採寸じゃ」

「分かっている」。

宗介は膝をついたまま、俺を見上げた。灰青の瞳が、潤んで見えたのは、ランプのせいだけではなかったはずだ。

「今夜だけ、許せ。測る手と、惜しむ手を、混ぜさせてくれ」

「……宗介」

「晴臣。お前は本当に、いい身体になった。初めて見たときより、ずっと。――自慢の、身体だ。誰のものになっても、誇っていい」

誰のものになっても。その言葉の痛さに、俺の目から涙がこぼれた。

「泣くな」

「泣いてない……」

宗介は立ち上がり、俺の涙を、親指の腹で拭った。そのまま、俺の顔を両手で包んだ。

「晴臣。俺は今から、お前に触れる。測るためじゃない。送り出す男の、最後の我儘だ。――嫌なら、言え」

「……嫌じゃ、ない」

「続けるか」

「続けて」

宗介のキスは、いつもより深く、いつもより切なかった。舌が絡み、息が混ざる。俺のシャツを、宗介は首の後ろから脱がせた。下着も、丁寧に下ろした。台の上に、俺は裸で立たされた。だが恥ずかしさはなかった。この男の前に立つとき、俺はいつも、誇らしい気持ちになるのだった。

「見せてくれ。最後に、全部」

「……宗介の、意地悪」

「ああ。意地悪だ」

宗介の手が、俺の身体を辿った。首筋、鎖骨、胸の中心。測るように正確に、そして測るときよりもずっと貪欲に。乳首に触れた指が、円を描いた。俺の身体が、小さく跳ねた。

「あっ……」

「声も、覚えておく。お前のこの声は、俺だけが知っている」

宗介は俺を台から下ろし、ソファへ導いた。仮眠室のベッドではなく、仕立て部屋のソファ。二人が、仕事の合間に腰掛けてきた場所。

「宗介、ここで……？」

「この部屋で、お前を抱きたい。この部屋で、お前と出会った。――晴臣、来い」

俺は宗介の上に跨がった。宗介のシャツを、自分で脱がせた。広い胸。厚い腕。俺の知っている、頼もしい身体。その熱い皮膚に、俺の掌を当てた。

「宗介の身体は、俺も覚えてます」

「そうか」

「肩幅、五十二。胸囲、百六。……俺だって、測ってきたんです。目で。手で」

「生意気だ」。

宗介は笑って、俺の腰を引き寄せた。

「なら、確認し合おう。今夜は、互いの寸法を」

宗介の指が、俺の中に入った。俺は宗介の肩に顔を埋めた。丁寧に、焦らすように、指は俺を解していく。今夜の宗介は、時間をかけた。まるで、一秒ごとに別れを惜しむように。

「宗介、もう……」

「ああ」

宗介自身が、入ってきた。俺は宗介の首に腕を回し、その重みを受け止めた。ゆっくりと、深く。二人の身体が、一つの形に収まっていく。

「晴臣」

「宗介……」

「お前は、俺の最高傑作だ。服じゃない。お前という人間が、だ」

「そ、んな……あっ」

「誰の手に渡っても、その事実は変わらない。——だが、晴臣。もし、お前が迷

うなら。もし少しでも、俺の手に残りたいと思うなら」
宗介の動きが、止まった。深く繋がったまま、宗介は俺の顔を見た。
「そのときは、言え。お前の言葉で。俺は、お前の言葉しか信じない。お前が『残る』と言えば、俺は一生、お前を離さない。逆に『行く』と言えば、今夜限りで綺麗に送り出す。――決めるのは、お前だ」
涙が、またこぼれた。最中だというのに、俺は泣いた。泣きながら、宗介にしがみついた。
「ずるいよ、宗介。それじゃ、俺……」
「ああ。ずるいさ。だが、これが俺の精一杯の、正直だ」
宗介は俺の涙を唇で受け、それからまた、動き始めた。今度は激しく、惜しむように、求めるように。俺は宗介の名を何度も呼んだ。ソファが軋み、二人の息が部屋に満ちた。

「宗介、宗介……あ、あっ……！」
「果てろ、晴臣。俺の腕の中で」
俺は、宗介の腕の中で果てた。身体が震え、声が漏れた。宗介も、俺の名を呼びながら、深く果てた。
事後、宗介は俺を抱いたまま、長い間、背中を撫で続けた。タオルで身体を拭い、温かい飲み物を口に含ませてくれた。その手つきの優しさが、今夜ばかりは刃のようだった。
優しいから、痛い。送り出してくれるから、痛い。
「……宗介」
「うん」
「俺、週末までには、答えを出します」
「ああ。待っている」

その言葉を最後に、俺は宗介の腕の中で眠った。眠りの際まで、俺の頭の中では、二つの未来が交錯していた。

表舞台に立つ俺。そして、宗介の手を離れた俺。

どちらも、俺の人生だった。

答えを出す週末の前日。金曜日の夜、俺は店にいた。仕付けの日だったが、宗介は俺の顔を見るなり、眉を寄せた。

「……痩せたな。頬の線が、変わった」

「え」

「三日で、顔の張りが落ちた。悩んでいるからだ。飯は、食っているか」

「食べてます」

「嘘だ。お前の嘘は、身体に出る」。

宗介は、作業を中断して、台所へ立った。

「今日の仕付けは、中止だ。まず、飯を食え。話は、それからだ」
宗介の作る飯は、いつもながら手際がよかった。味噌汁には具がたっぷり入っていた。焼き魚、煮物、小鉢が二つ。俺は、言われるままに食べた。食べながら、なぜか涙ぐんだ。
「宗介」
「うん」
「俺、ずっと考えてました。ノールのこと」
「ああ」
「考えれば考えるほど、頭が二つに割れるんです。モデルの俺と……宗介の恋人の、俺と」
宗介は、自分の茶碗を置いて、静かに言った。
「晴臣。俺から、一つだけ言っていいか」

「はい」
「俺は、お前を引き止めない。それは、最初から決めている。だが、一つだけ、誤解するな。――俺は、お前が『行く』と言っても、平気なわけじゃない。平気な顔をしているだけだ」
俺は、箸を止めた。
「宗介……」
「お前を送り出す準備をしながら、俺は毎晩、台帳のお前の頁を開いている。数字を眺めて、思い出している。お前の身体の、全部を。……それでも、送り出すと言っている。なぜだと思う」
「なぜ、です」
「お前を愛しているからだ」。
宗介は、真っ直ぐに言った。

「縛るのは、愛じゃない。俺の師匠は、俺を縛らなかった。『出ていきたければ出ていけ。その代わり、出ていかないなら、とことんやれ』と。俺は、出ていかなかった。師匠の、その潔さに惚れて、残ったんだ。――晴臣。俺は、師匠と同じことをする。お前が残るなら、自分の意思で残れ。それ以外のお前は、要らない」

俺の目から、涙がこぼれた。飯の席で、俺は子供のように泣いた。

宗介は、何も言わず、ティッシュを差し出した。それから、俺の背中を、大きな掌でゆっくりと撫でた。あの、衣装を縫ってくれた手。俺の人生のほつれを、縫い直してくれる手。

「……宗介。俺、もう少しだけ、考えます。週末まで」

「ああ。考えろ。とことん考えろ。お前の人生だ。――だが、飯だけは食え。考えるのは、腹が減っていてはできない」

「はい……」

その夜、店を出るとき、宗介が言った。

「晴臣。どちらの答えでも、月曜に仕上がるシャツは、お前のものだ。それだけは、変わらない」

「ありがとう、ございます」

裏通りの冷たい空気の中で、俺は深呼吸をした。決断の日が、近づいていた。だが不思議と、心は静かだった。引き止めない男の愛し方が、俺の背筋を、まっすぐに伸ばしてくれていた。

――この男のために、正直な答えを出そう。モデルの俺にも、恋人の俺にも、嘘のない答えを。

家に帰ってからも、宗介の言葉が耳に残った。

「出ていかないなら、とことんやれ」。

師匠と弟子の、十五年の物語。その物語の、新しい章に、俺は立っているのかもしれない。

俺の答えは、その章を続けるのか、閉じるのか。その選択だった。

週末。返事の期限が迫る中、俺はノールの旗艦店の前まで、一人で行ってみた。

ガラス張りの、大きな店舗。店内には、洗練された服と、洗練された人々。

ここのイメージモデルになるということは、この世界の顔になるということだった。

ショーウィンドウに、自分の顔が映っていた。

もし、あの話を受ければ。俺の顔は、ここに飾られる。全国の店舗に。広告に。雑誌の表紙に。

二十七歳のモデルが、一生に一度、掴めるかどうかという夢が、ガラスの

向こうにあった。

だが、俺の足は、店の中へは進まなかった。代わりに俺は、携帯を取り出し、宗介の店の写真を見た。以前、自分で撮った、真鍮のプレートの写真。

夢と、帰る場所。その二つを天秤にかけたのではない。夢の側にも、帰る場所の側にも、俺の人生はあった。問題は、どちらの人生を、俺が

「自分のもの」

だと胸を張って言えるか、だった。

ノールの専属になれば、俺は安定する。だが、俺の身体の物語は、そこで終わる。専属チームのデータシートの中で、俺の数字は、ただの

「サイズ」

として処理される。努力の跡も、選ばれた誇りも、そこには記録されない。

宗介の台帳は、違う。あの台帳の中で、俺の数字は生きている。変化には物

語があり、物語には意味がある。

「俺は、物語の方を選ぶ」

小さく、声に出して言った。誰も聞いていない銀座の歩道で、俺は自分の答えを、自分の耳に聞かせた。

言ってしまえば、単純な話だった。俺は、数字として扱われる人生より、物語として生きる人生が欲しかった。その物語の、共著者が宗介だった。

帰りの電車で、俺は佐伯さんへの断り方を考えた。怒るだろう。呆れるだ

ろう。だが、言うべきことは決まっていた。

「条件の、採寸の件が、俺には無理なんです」。

それは、嘘ではなかった。業界的には小さな条件に聞こえるだろう。だが俺にとって、それは人生の全てを懸けた条件だった。

月曜の朝が、近づいていた。俺の答えは、固まっていた。あとは、それを相手に伝え、宗介に伝え、自分の一生に刻むだけだった。

第10章　あんたにだけ、採寸させる

週末。俺は事務所の会議室にいた。

佐伯さんが、契約書の束を持って待っていた。ノールの専属契約。

今サインすれば、俺の人生は大きく開ける。

「白瀬、よく考えた？　この機会を逃したら、次はないよ」

「……考えました」

ペンが、俺の前に置かれた。

俺は、この数日を思い返していた。

ノールの話が来てから、俺は毎晩、鏡の前で自分の身体を見た。百八十四センチ。肩幅四十四、胸囲九十五、胴回り七十八。宗介が覚えてくれた数字。宗介の手で仕立てられ、宗介の目で愛でられてきた身体。

この身体を、俺は、誰の手に渡したいのだろう。

金は欲しい。名声も欲しい。だが、それらを手に入れるために、この身体の

「担当」

を他人に渡すことが、俺の中で、どうしても折り合いが付かなかった。

なぜなら、俺の身体は、もう単なる商売道具ではなかったからだ。

宗介と出会う前の俺は、自分の身体を、ただの

「素材」

だと思っていた。痩せろと言われれば痩せ、鍛えろと言われれば鍛える。

身体は、仕事のための道具。誰が測っても、同じ数字が出るはずの、ただの物体。

けれど宗介は、違った。この男は、俺の身体の変化を

「物語」

寸法まで俺のもの。

として読んだ。一センチ太くなった胸囲に、努力を見た。五ミリ大きくなった肩に、覚悟を見た。俺の身体は、宗介の手の中で、初めて

「俺自身」

になった。

その身体を、専属チームの事務的なメジャーに渡すこと。それは、俺自身を、俺から切り離すことのように思えた。

そして何より。

宗介の、あの震える手を、思い出した。送り出すと言いながら、最後にもう一度測らせてくれと言った、あの男の手を。三十九歳の、不器用な執着を。

俺は、ペンを置いた。

「……すみません、佐伯さん」

「え？」

「この話、お断りします」
「白瀬！　あんた、正気！？」
「正気です。条件の、採寸の件が……俺には無理なんです」
「採寸って、あんた、それ、理由になる！？　ただのサイズ測定だよ！？」
「俺にとっては、違うんです」
佐伯さんは絶句した。当然だ。モデルが、専属契約を
「採寸されたくないから」
という理由で断る。業界の誰も、理解しないだろう。
「白瀬……あんた、それで本当にいいの。後悔しない？」
「後悔するかもしれません。でも」
俺は、自分の手を見た。宗介に何度も測られてきた、手首の細い手。
「でも、俺の人生で、一度だけでも『自分で選んだ』と言えることが、欲しいん

です。この仕事を始めてから、俺は、選ばれる側でしかなかった。キャスティングで選ばれ、衣装を選ばれ、ポーズを選ばれ。……初めてなんです。俺が、俺の身体の行き先を、自分で決めたいと思ったのは」

会議室を出ると、冬の空が晴れていた。

俺は、その足で銀座へ向かった。裏通り。真鍮のプレート。扉を開けると、鈴が鳴った。

宗介は、裁断台にいた。俺の顔を見るなり、眉を動かした。

「……早いな。返事は、週明けのはずでは」

「宗介」

「うん」

「断ってきました。ノールの話」

宗介の手が、止まった。鋏が、かたりと台に置かれた。

「……なぜだ」

「理由は、一つです」

俺は、宗介の正面に立った。灰青の瞳を、まっすぐに見た。

寸法まで俺のもの。

著者　碧汐

二〇二六年十一月八日

本作品はＡＩ一部利用です。制作工程の一部にＡＩを使用しています